

## 昭和十一年会

相川泰吉

私は一橋大学昭和十一年の卒業で、大平君と同期生である。しかし大平君は予科からの進学でなく、高商から大学に入ったので学生時代のことは全く知らない。官界へ入った彼と、民間会社へ就職した私と、それに競争という大きな時代の波があり、卒業後十数年、会う機会はなかった。

昭和二十六、七年頃、同期生が毎月一回昼食会に集まり、世間話や戦後の日本経済がどうなるか等話し合っていた。ちょうどその頃、大平君は衆議院議員に当選し、この昼食会によく顔を見せるようになった。私は卒業以来、十一年会の万年幹事をしていたので、よくこの会合に出た。たまたま同期平岡忠次郎君も、これは社会党からだが代議士に当選し、この二人がこの昼食会に出てきて、「わが党は」「わが党は」とやり合っているのを傍で聞き、この頃から大平君と親しく話をするようになった。しかし当時はまだ駆け出しの代議士で、晩年の重厚さはなく、失礼だがこの友が将来総理大臣になるとは思えなかった。ただ話していることにはったりがなく誠実な男だなあと感じた。大変忙しいなかでも、彼は十一年会の会合や旅行会には万障繰り合せよく出席してくれた。またゴルフの会に案内すると、遠いゴルフ場まで足を運んできて級友と一緒にプレーを楽しみ、チャンピオンカップ大平盃を寄贈してくれた。ゴルフは彼の最も好んだレクリエーションであつたらしい。

四年くらい前だったが、土曜日の夜突然電話をかけてきて、明日是非私とゴルフをやりたいという。場所は私が理事長をしている湘南カントリークラブでとのこと。何で突然そんなことをいうのかと聞くと、「実は明日真

鍋君（当時大平君の秘書官、今は参議院議員）を誘ったら君とゴルフをする約束をしている。俺も仲間に入れてくれ」という訳である。幸い一緒にプレーすることはできたが、私は当時不調のドン底で多叩き。彼のゴルフはご承知の通り決してフォームが美しいとは申しかねるが、スコアはよくまとめる。この日も九十五ぐらいで回ったと覚えている。その後余りゴルフの話はしなかったのに、昨年四月十一日に開催した十一年会に出てきて、この時はゆっくり一時間半くらい級友と時局談や雑談に時を過ごしたのだが、隣にいて何を思い出したのか「君にはゴルフは負けんよ」と一言洩らした。多忙を極めていた時期で好きなゴルフもできず、ストレスが溜ってついこんな言葉が飛び出したのだろう。そしてその二カ月後に忽然として彼は昇天してしまった。一度やつつけておけばよかったと残念に思っている。この十一年会が、多くの同期生との最後の別れになってしまった。

二年ほど前に彼と話し合っている時、私は彼にこんなことを話した。「人生のほんとうの楽しみ、安らぎはどこにあると思う。もう七十に近い歳になってみると結局は穏やかな家庭生活にあるんじゃないかと、この頃つくづく思うようになった。私は会社に入っていっぺんも社長になろうと思つて仕事をしたことはないのに、いつの間にかなつてしまった。これは運命である。なつて見ると果たして社長の仕事など決して楽しい毎日ばかりではない。しかし誰かがやらなくてはならない仕事であり、なつた以上は誠心誠意会社の発展のために最善の努力をしている。そしてある時期には次に譲り、ゆっくりした生活がほしい。君は総理大臣という日本最高の地位に就いているが、どう思う」と。彼は温顔を私に向け、「二、三度うなずいて「君のいうことはよく解る」と答えた。

彼の死後、女婿の森田一氏がある追悼文の中に「義父は最終的に政治をとるか家庭をとるかという選択に迫られたら、この人は家庭をとつたと思う」と書いておられるが、私は読書と思考それにゴルフといった、ゆっくりした人生の期間を持てなかつた彼を、ほんとうに気の毒だと思つている。